

# 東京日々新聞

九百廿四号



萬齋  
芳幾  
引

温克堂龍吟誌

意う  
情と生じ  
情變て煩  
悩と生ぜ  
煩悩より愚痴  
生じて是と名つけし其想と  
の云想の中よ色情と生伏  
此色情と四つより互に思ひ  
慕ひて天よあらは比翼の  
鳥地よ有らば連理の枝と  
云宗真似し真情と言ひ去日  
の情人へ良時の俣其日くの風次第  
は是を所習詩情とて不登る人なり 黄金と云ふと枕の下へかの手よ入極  
て掛るとは情とす痴情は是と事か 先方何れも思ひぬを自分てては 恋の湖行徳  
船の乗子ある早川伊太良と呼ぶ方あり 新芝原龍吟奇屋の鳩妓とて 三言三言と別れて百夜へ  
愚千夜くけて 通へ先方空吹く雨本年二月と旬と例の如く遊妻は未り如何なる事故のあり  
けるも長別とて 疵と負せ其見も自殺するは 是又痴情とせし事死將外ま  
子細ありたり 必記若し知らぬ 唯世の好男子の爲に誌して後世の  
戒と備ふ 詩乳山麓

人面具足屋